

様式2 **令和4年度 清瀬市立清瀬第十小学校 学校評価計画**

学校教育目標	・豊かに感じ、よく考える子ども ・友達の良さがわかり、助け合う子ども ・心身をきたえ、明るく生きていく子ども
目指す学校像(ビジョン)	【目指す学校像】①児童にとって明るく楽しく安心できる学校 ②教職員にとって明るく楽しく指導が行える学校 ③保護者・地域と連携し信頼される学校 【目指す児童・生徒像】自分を大事に、かかわりを大事に、今を大事に、未来を大事にする児童
育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動	○育成を目指す資質や能力を「他者とのかかわりを通して、よりよく問題を解決できる力(協働問題解決力)」とした。それを実現させるために必要な能力を以下の4つとした。 ・基礎的な力(言語、数量、情報スキル) ・他者と共に考える力(協働問題解決力、メタ認知) ・他者と共生できる力(人間関係形成力) ・社会の中で実践する力(社会参画力、自律的活動力) 学ぶ楽しさ、分かった・できた喜びを感じられる授業の実践、自他の命を大切にす心情を育む教育の充実によって、育成すべき資質や能力の実現を図る。 また特色ある教育活動としてタブレット端末、「十小のきまり」、「十小ファミリールール」を活用したり、「十小リボンプロジェクト」や養蚕体験を通した命の学習に取り組んだりする。

前年度までの学校経営上の成果と課題
 成果 確かな学力の向上、健やかな体の育成、本校の特色は取組指標、成果指標それぞれの項目が「4」となっており、学校関係者評価でも信頼と期待された御意見をいただいている。豊かな心の育成におけるいじめへの対応、特別支援教育における組織的対応も取組指標、成果指標それぞれの項目が「4」となっており総じて安全・安心な学校として教育活動が展開されている。
 課題 取組指標が「4」ではあるが、成果指標が「1」とその項目の中で一番低かったのは、特別支援教育の充実として定めた「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。」であった。学習支援を必要とする児童の一人一人のつまずきやニーズを的確に分析し、その人数を増加させないことが課題である。

柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策	
		取組指標	成果指標	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策	
確かな学力の向上	児童の思考・判断・表現力を育成するための授業改善を行う。	4	4	課題 アンケート結果では、95%の児童が肯定的な回答を示しているが、一部、学習内容を理解するまでに時間がかかったり、集中力が持続できなくなったりする児童がいる。 方策 児童にとって「分かった・できた」と感じられるよう、さらなる授業改善を行う。	95%の児童が肯定的な回答を示しているのは素晴らしい。先生方の努力が見える。先生方も自信を持って、授業改善を思い、その結果、児童もそれに応えているということだと感じている。更に個に応じた学習方法も取り入れ、100%を目指すというところで次年度に期待がもてる。	語型や手順の提示といった視覚的な支援、ペアやグループ活動を取り入れた学習形態の工夫や思考ツールの活用を通して、一人一人の児童が自分の考えをもち、友達との話し合い活動を通して、自分の考えを広げ、深めていけるようにする。
	朝学習や十小チャレンジタイムに、タブレット端末を活用した個に応じた学習を実施する。	4	3	課題 児童アンケートの「ドリルパークで学習することで、学習が身に付いた」の項目で79%が肯定的な回答を示したが、21%の児童がドリルパークだけでは学習内容が身に付かないと感じており、個に応じた学習を実施する。 方策 ドリルパークに加えて、授業時間内やペーパーテストでの反復練習も取り入れる。	ドリルパークは個人が頑張った分、級が上がっていくので、児童のやる気に繋がって良いと思う。しかし、子供たちもそれだけでは学習は身に付かないと感じているようなので、ペーパーテスト等引き続き活用方法を模索していただきたい。	ドリルパークに関しては、朝学習を中心に行う。また、ドリルパークだけではなく、ペーパーテストでの反復練習も取り入れながら、個に応じた学習を実施する。家庭においても反復練習を促す。(タブレットの持ち帰り可)
豊かな心の育成	月1回のあいさつ運動や、十小リボンプロジェクトを行う。	4	3	課題 児童アンケートの「自分からすすんで挨拶できている」という項目で87%が肯定的な回答を示した。肯定的評価ができなかった児童についての分析をするとともに評価基準の見直しを図る。 方策 月1回の挨拶運動を継続し、児童の心に響く指導を行い、主体的に挨拶できるようにする。	挨拶を指導するのは家庭が基本だと思う。ただ、マスク生活で「誰だろう」という不安はあると思うので、保護者、先生方など、大人からも積極的に挨拶していけると良い。挨拶運動は児童が主体となって進める予定になっっている。	挨拶運動を継続するだけでなく、挨拶の気持ちよさなど挨拶の意味や価値を理解させ、児童の心に響く指導を行い、主体的に挨拶できるようにする。教職員も積極的に児童に挨拶する。担任は、児童がすすんで挨拶ができるかどうか実態把握をし、学級内において個別に指導する。
	ふれあいアンケートを定期的に実施する。いじめがあった際は、いじめ防止対策委員会で対応する。	4	4	課題 いじめを発見し、解決することができたが、いじめに繋がる児童同士のトラブルについてなるべく早く発見し、いじめの未然防止に努める。 方策 今後もふれあい月間アンケート6・11・2月、児童の振り返りアンケート7・12月を実施したり、いじめ防止対策委員会を開いたりして、対応策を考え実行し、今後も学校全体で組織的に対応する。	しっかりと学校全体で体制を組んでいて、早期解決を行っているということで安心した。引き続き、体制の維持を継続してほしい。また、アンケートも形骸化しないように、いじめの未然防止として活用してほしい。	いじめの兆兆に対して、教職員で共通理解を図り、いじめの未然防止に努める。今後もふれあい月間アンケート6・11・2月、児童の振り返りアンケート7・12月を実施したり、いじめ防止対策委員会を開いたりして、対応策を考え実行し、今後も学校全体で組織的に対応する。
健やかな体の育成	体育指導の工夫改善や、体力向上旬間を実施する。	4	4	課題 学期一度の体力向上旬間(サーキット、縄跳び、持久走)を行い、児童の体力アップに繋がる取組みができたが、一部、体育や外で運動することに苦手意識をもつ児童がおり、苦手意識を払拭させる。 方策 今後も体力テストの練習や体力向上旬間の取組を継続し、児童がすすんで運動に親しめるようにする。	苦手意識を持つ児童も、様々な取組で少しずつでも楽しめる取組だと思うので、可能な限り、継続してほしい。また、体力テストの練習を取り入れることも期待している。	体力テストの練習を実施し、数値的体力向上を目指す。そのために、体力向上旬間の取組を継続し、全ての児童がすすんで運動に親しめるようにする。
	「早寝・早起き・朝ごはん」など、生活指導の月目標に合わせて指導する。	4	4	課題 保護者、児童ともに、うがい・手洗い、早寝・早起きの意識は高まったが、学級での指導の時間が十分にもてなかった。 方策 今後も保健便りで早寝・早起き・うがい・手洗いの大切さ、給食便りで朝ごはんを食べることの大切さを啓発していき、保健指導や学級指導も合わせて継続する。	保健だより、給食だよりなどで家庭にも啓発されており、学校での取組を見やすい。家庭でももっと関心をもつべきだと思う。コロナ禍における生活の変化によって、手洗いの大切さを忘れないように指導していただきたい。	保健だより、給食だより、学校だより、保護者会で家庭に啓発し、児童には手洗いも含めた学級指導を継続的にやっていく。
特別支援教育の充実	校内委員会を定期的に開催し、保護者、SCや巡回相談心理士と連携しながら、児童の実態や指導方法を共有し、実践の振り返りを行う。	4	2	課題 1学期アセスで要対人支援領域の児童8名存在し、2学期は6名となったが、大幅な減少には至らなかった。 方策 友人関係や日常生活において継続して気を配る。ただ取組指標の評価基準が厳しいので、児童の実態をふまえた成果指標の評価基準を見直し、教員たちをエンパワーメントする。	アセスで要対人支援領域人数が減少したことは素晴らしい成果であり、短期間で大幅な減少は難しいと思う。支援領域から出られなかった児童も、少しでも上のラインに近づくと数値になっていけば大きな成果だと思う。数字にこだわらず、個を見ていただけたらと思う。	友人関係や日常生活において継続して気を配る。成果指標の評価基準の見直しを図る。アセスにおいて要支援領域の児童が現状維持となった場合、3とする。かつ、全体の数値の増減だけではなく、個人における困り感の変容について見取る。
	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。	4	2	課題 1学期アセスで要学習支援領域に30名存在し、2学期は22名となったが、大幅な減少には至らなかった。 方策 個に応じた学習指導は継続して行う。ただ成果指標の評価基準が厳しいので、児童の実態をふまえた取組指標の評価基準を見直し、教員たちをエンパワーメントする。	上記同様に、支援領域から出られなかった児童も、少しでも上のラインに近づくと数値になっていけば大きな成果だと思う。個に応じた学習指導を行っているとのことなので、評価基準も個に応じたものの方が良いのではないかと思う。	個に応じた学習指導は継続して行う。成果指標の評価基準の見直しを図る。アセスにおいて要学習支援領域の児童が現状維持となった場合、3とする。かつ、全体の数値の増減だけではなく、個人における困り感の変容について見取る。
本校の特色	蚕学習、赤ちゃんの手カラプロジェクト、認知症サポーター養成講座、松竹梅十科学の力向上プロジェクト、町探検、保育園・幼稚園との交流等、体験的な活動を実施する。	4	4	課題 各学年が体験的な活動に取り組み、児童の意欲を高めることができた。また全学年で「石田波郷出前講座」を行い、俳句大会への投稿と運動させた授業を行うことができた。今後も児童の興味関心がさらに高まるような体験的な授業を取り入れていくことが課題である。 方策 児童が興味をもつような体験的活動を多く取り入れる。	全学年で様々な体験学習に取り組みでいていい。意欲的に交流、体験ができていく。色々な人と会って、話を聞き、様々な経験することは児童にとって貴重であり、財産になる。今後も継続してほしい。	蚕学習、赤ちゃんプロジェクト、石田波郷俳句講座など、今後も全学年で、児童が興味をもつような体験的活動を継続して取り入れる。
	ICTを活用するなどして、協働問題解決学習を推進する。	3	4	課題 児童アンケートでは「タブレット型パソコンを使った授業は楽しく分かりやすい」という項目で91%が肯定的な回答を示したが、教員のアンケートでは、ICT活用は個人差があることが分かった。 方策 ICT支援員も活用しながら、教員のICT活用技術の向上を図る。	業務量が多い中、先生方のICT技術を向上させるのは大変かと思うが、対応しなければならない現実もあると思う。ICTを活用した学習支援方法に学年・クラスによって差が生まれないようにしてほしい。	学年やクラスによって、ICTを活用した授業展開に差が出ないよう、ICT支援員も活用しながら、教員のICT活用技術の向上を図る。